

近代淨曲巨匠私見

辻 部 華 翠

(一) 竹本攝津大縁

(二) 竹本彌大夫 (五代目、木谷)

(三) 竹本津大夫 (二代目、法善寺)

(四) 竹本大隅大夫 (井上)

(五) 竹本組大夫

(六) 竹本住大夫

(七) 竹本越路大夫

(八) 竹本春子大夫

(九) 竹本彌大夫 (六代目、竹内)

(十) 豊竹古靱大夫

(十一) 結 論

まへがき

これから述べやうとする所は私の自分の耳で聞いたと率直な偽らざる判断であつて、世間の所謂定評、通見とも、大分異なる所があらうと思ふ。勿論、私は自

分の判断に絶對的な自信をもつものではない。人、それぞれに自分の好みがあることはいふまでもない。私の好みが少し偏してゐるかも知れない。自分でその點を省みてみて、大體私は、いふところの「うたふ淨瑠璃」を好まず、「かたる淨瑠璃」を、義大夫の本道と固く信じてゐる所が、先づ私の價值判断、乃至嗜好を、決定的に規定してゐると考へないものでもない。しかしこの點は私の一つの信條であり、又兎も角信條である限り趣味判断といふものは、他の人がどう言はうと枉げ難いものだと思ふのである。それ故私の平生抱いてゐる率直な判断を、有りのまゝ大膽に、以下述べてみやうと思ふ。同見の士があれば甚だ幸ひである。又後に來る同好の方々には些少なりとも参考になる點があれば、更に望外の欣びである。

(一) 竹本攝津大縁

近來の人々は、口を開けば、殆んど皆、三味線の團平大夫の攝津大様、を絶對的な稀世の大名人の如く云ふ。前者に關しては異存はない。しかし後者を私はどうしてもしよう思へぬのである。

私が始めて文樂の木戸をくぐつたのは、明治二十五年のたしか十月であつたと憶えてゐる。「先代萩」の通しをやつてゐたのであるが、路大夫の「鶴ヶ岡」はらはらやの呂大夫の「原田屋敷」、先代津大夫の「埴生村」、長尾大夫の「竹の間」の印象は、それ／＼今に忘れぬものがあるに拘らず、越路（後の大様）の「御殿」の印象は甚だ不鮮明で、感銘しなかつたことを、今も憶えてゐる。

もつとも當時全盛期の彼の「御殿」が悪かつた筈はないかと思ふ。私の鑑賞力が未しといふ所が多分にあつたせいもあらう。しかしその後、於て、なるほど彼を一方の傑物と感じたことも再三ではない。「二十四孝」（十種香）

「三勝酒屋」、「新口村」、「妹背山御殿」、「中將姫」等には又、「菅原」四段目（寺子屋）で、源藏戻りといふのは送りの件に、なるほどいいと思つたが、源藏と松王（明治三十四年一月）は同時に開場した明樂座の大隅に比し確に一籌を輸すると感じた。皮肉屋の野澤悟助が「越路（大様の淨瑠璃は普通の人より木戸錢を倍額とるが、その値打はたしかにある、あの人の淨瑠璃には、清元や新内がはいつてゐるから、一つの義大夫でいろいろのものがきける

から」といつたことを記憶する。とはいふものの、彼は藝界稀に見る福祿壽の揃つた人で、貴紳に好評を博したのも、さこそと思へるだけ上品さはたしかにあつた。彼のため文樂座は大繁昌を來し、年も八十餘歳まで長命し義大夫の社會的地位を、とにかく引上げた功は十分認めるに吝かではない。

是について二三年前「ラヂオ」の座談會で土佐大夫の次の様な話しを思ひ出した。

大隅大夫の文樂出演中（明治三十六年五月以降、三十九年六月迄の間のこと）攝津大様が「大隅大夫の語つて居るのを聞いて「中々よく語つてゐる。併し此様な語り方をして居るとキツト身體をこはすだらう」云々。

私が大様の淨瑠璃に何となく今一段の迫力を感じなかつたことは右の談話の一節で首肯されることと思ふ。即ち全力を盡して一生懸命に語つて聽者の肺腑をえぐる大隅大夫の語り口に比し、やゝ樂に餘裕を存して語れる攝津大様の淨瑠璃が遜色あるを感ずる所以である。

（二） 竹本彌大夫（五代目、木谷）

私はこの人の歌祭文の油屋（めし挽）戀女房の沓掛村櫓襖錦の大安寺堤、忠臣藏四段目、二十四孝の勘助住家双蝶々の引窓、ひらかな盛衰記の逆櫓、新薄雪の兵衛館宗五郎子別れ等を聞いて絶讃に値すると思つた。

元來が悪聲で聲量にも恵まれず、所謂腹がうすい人であつたに拘らず人物の躍動すること稀に見るところ、性格の語り分けでは一寸前後に類を見ない人であつたと信じてゐる。

これは、直接私がきいたのではないけれども、或時菅原の道明寺の掛合で津大夫(法善寺)の菅相丞、組大夫の宿禰太郎、新靱の土師兵衛、染大夫の判官輝國等に伍して、覺壽尼を受持ちこの歴々の人々をさらつてしまつたと云ふ話を聞いてゐる。さこそと思はれる節がある。殊にこの人に感心する點は、師匠長門大夫を神の如く敬つて、後進の禮を盡し、更に又淨瑠璃が文樂一座に吸収されることの弊を悟つて、二座競立の意義を思ひ、名人團平等と謀つて稻荷座の創立に盡力し自ら出勤し、同座没落後、明樂座、堀江座の開場を極力應援し、後輩を指導鞭撻して倦まず、且自分の門人なると否とに拘らず苟しくも來つて教を乞ふものには溫蓄を傾けて惜しみなく教へ、一生涯淨曲の振興と後進の誘掖を以て生命とせる一大偉人なりと謂ふことが出来る。彌大夫を言葉語りの名人とするは敢て私一家の私言ではない。彌大夫が稻荷座を退く一年前の評をひいての私言の誤りならぬ證とせう

稻荷座素人評、中狂言の大安寺堤は彌大夫得意の語りのものとかや、人物の活動する點に於いて群大夫中、此の人に及ぶものありしと思はれず、目をつぶりて

聞けば次郎右衛門も新七も武右衛門も下部の末に至るまで悉く彷彿として其人を見る如き感あり、妙の妙、さすが詞語りの名人と云ふべし「さすりませうか、いや手がさはると猶痛む」のあたり何度聞いても飽さるべし「出をろ出ませ」の下部の詞は尤も得意の處と聞きしが、いかにも妙なり。「青江下阪二つ胴にてよつく切れます」の次郎右衛門の詞も實目十分に備はりて見えぬ。

(明治三十年六月十七日。大阪朝日。以下次號)

重兵衛の笠

某日某處へ寄集つた淨瑠璃雜誌同人の犬天狗共、沼津の話から天氣模様が問題となり、平作が「今日は結構なお天氣ぢやなア」と言ひ、「伴ひ入るや西日影」とあり、「日和が知れぬ」で一且曇つたにもせよ、晩は「三日月様が上つてござる、好い月夜で」あるし、松原では虫が鳴いてゐるのに、重兵衛が平作に笠をさしかけるのは一えん解せぬ話、胡弓の入る意味を知らぬ、それを名人榮三までがへボ役者同様やるのはけしからぬ、一番へこましてやれと、上使に立つたのが鴻池幸武、咳一咳徐ろに口を開いて「榮三はん、重兵衛が平作に笠をさしかけるのは何故です」榮三即座に答へて「あれは夜露を除けるのだす」にギャフン。天狗の鼻をひき結んで歸つたが、ふらねばよいが、と斷つたり、雨音をきかせる歌舞伎役者共とは心掛が格段、あゝ榮三名人様々々。(木葉天狗)